

音楽をめぐる断想

井上清彦 S41 経

朝6時前に目覚まし時計で目をさまし、寝ぼけなマコで居間に入るとTVからクラシック音楽が流れてくる。「クラシック倶楽部」という番組だ。コロナ前後にNHKが収録した演奏会が音源だ。そのあと6時までの5分間は、「名曲アルバム」だ。先日は、ベートーヴェンのピアノソナタ「月光」の旋律が流れ、着替えをしながら聴きほれる。作曲に関するテロップが流れ、30歳のかなわぬ恋の想いを知る。(わたくしも青春時代、同じ思いをした経験がある)。映像も欧州の街並みが登場し、郷愁もあり朝の感覚を心地よく刺激してくれる。

ラジオでは、月曜日から木曜日の朝6～9時は、J・WAVEで別所哲也司会の「おはようモーニング」の時間だ。番組中は、様々なジャンルの曲をオンエアしてくれる。私にとって、今はやりの歌声を内外問わず知ることできる貴重な情報源だ。時には、歌い手や演奏家も登場する。ときどき妻と、流れている曲の「あってっこ」をする。

「今流れているの、『藤井風』(岡山生まれの24歳、シンガーソングライター)じゃない」との妻から。

「そうだね。最近よくかかるね」と答えるわたし。

「やっぱり私があたっていたわ」と誇らしげに話す妻。

こちらが「これ、『カーペンターズ』の妹カレンの歌じゃない」と答え、正解で溜飲をさげることたまにはある。

同ラジオ番組8時5分過ぎに、私の大好きな「モーニング・クラシック」の月曜日から木曜日まで毎朝10分間のひと時がある。クラシック・ソムリエの田中泰さんの紹介する作曲家の解説が最初に流れる。過日は、今年は、6年に1度(去年は5年毎の該当年だったがコロナで1年延期になった)ショパンコンクールが開催される2週間前だと思うが、「ショパン・コンクール・ウィーク」と銘打ち、過去のコンクール優勝者から印象に残る演奏を毎日ひとりずつ流してくれた。この番組は内外の名作曲家や演奏家の生誕日あるいは没後〇〇年を記念して、その週の月曜日から木曜日まで4回で完結するという趣向だ

日本人も多分にもれず、今年が没後25年にあたる作曲家・武満徹氏を取り上げた。氏は、尺八や琵琶を取り入れた「ノヴェンバー・ステップス」など世界にその名を知られている。しかも正式な音楽教育を受けたことがないという作曲家で、しかもビートルズや桑田佳祐氏も好きだということにも親しみを感じる。杉並区在住の谷川俊太郎氏の詩に曲をつけた歌も気に入っている。

私の育った環境は、昭和7年に出来た家にピアノがあったわけでもなく、応

接間に古い蓄音器があり、竹の針もあったことを思い出す。教育熱心だった親も、音楽まで思いが至らなかった。わたくしの育った昭和20、30年代は、今ほど音楽を習うのが一般的でなかった。私は青年時代に、ギターやウクレレをかじってみたが、続かなかった。音楽は鑑賞のみで、楽器を見事に演奏している周りの人たちを見ると「自分には到底できないこと」とただただ感嘆するばかりだ。

たとえ演奏できなくても、音楽を鑑賞する力は、神様がとっておいてくれたようだ。音楽学としては、高校の音楽授業で「コールユーブンゲン」を、音を外さないように小声で歌っていた。大学教養科目では、バロック音楽の権威、皆川達夫さんから、ビバルディ「四季」を学んで、すっかり気に入って、イ・ムジチ合奏団演奏を購入しよく聴いた。

クラシック音楽だけではなく、もっと軽い音楽も好きだ。映画音楽も好きだ。「シンドラーのリスト」はその典型でお気に入りの旋律だ。この曲をよく取り上げるバイオリン演奏者の古沢巖のコンサートは、何回か妻と演奏を聴きに行っ



た。

ミュージカルも好きで、舞台は、「オペラ座の怪人」、「レ・ミゼラブル」などだ。手軽なところではミュージカルや音楽映画だ。最近では「ラ・ラ・ランド」、「美女と野獣」、「ザ・グレート・ショーマン」、「ボヘミアン・ラプソディ」があげられる。

究極は、「ニューヨーク・メトロポリタンオペラ」だ。映画館の大画面で、臨場感満点の舞台

が映し出される。これは至福の時間だ。コロナでしばらく遠ざかっているが、早く実現したい。

2021年のクリスマスは、「ムジーク ファライン」の12月企画により自宅近くの杉並公会堂で、日本フィルによる、ベートーヴェンの第9「合唱」コンサートが指揮者小林研一郎、テノール錦織健で開催される。

家のコロナ検疫官である妻の許可を得て、今年を締めくくる時間が楽しみだ。ベートーヴェンの言葉「苦悩を通じて歓喜に至れ」を胸に。コロナの収束を願って、「歓喜の歌」を心の中で高らかに歌いたい。

